

## 巻頭言

# ユーラシアの中心に芽吹く改革 ——学会ウズベキスタン訪問記

平野 正雄

前 日本ビジネスモデル学会 会長

2025年9月初頭、韓国仁川空港で飛行機を乗り継ぎ、天山山脈を越えると間もなくウズベキスタンの首都のタシュケントの国際空港に到着する。夏の夕刻に降り立った日本ビジネスモデル学会の一行を、砂漠からの乾いた風が心地よく出迎えてくれた。

中央アジアの広大な大地、その心臓部に鎮座するウズベキスタンは、歴史の壮大な流れの中で常に重要な結節点であり続けてきたところである。この国は、単なる現代の国家区分ではなく、東洋と西洋の文化、宗教、そして商品が交錯したシルクロードの最も華やかな記憶が刻まれた場所でもある。多くの探求者や歴史家、そして旅人を惹きつけてきたこの国に初めて立つことができたのは、学会での訪問とは言え僥倖である。

ウズベキスタンは、中央アジアを構成する五つの国、すなわちカザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンのすべてと国境を接する、この地域の地理的なハブとしての役割を担っている。同時に、海への出口を二重に閉ざされた二重内陸国という、世界でも稀な地理的宿命を背負う。この厳しい環境下で、いかにして高度な文明が築かれ、維持されてきたのか。この矛盾こそが、ウズベキスタンという国の根源的な魅力である。

空港から市内へのバスの車窓から、この国の現在を感じ取ることができる。ソビエト連邦時代の計画都市の名残りといえる広大な道路、その上を埋めつくす中国製の電気自動車、時折目に飛び込むイスラム国家を象徴するモスクの尖塔、そしてウクライナ戦争を逃れてきた多くのロシア人が住んでいると言われる高層マンション群。複雑な地政学的な情勢の中にあいながら、中央アジアで最大の人口を擁するこの国は、2016年以降のシャフカト・ミルジヨーエフ政権下により経済改革を推し進めており、この国の高い経済成長のポテンシャルが注目されているところである。

実は今回の訪問は、当学会プリンシパルの帝京大学露木教授を通して現地中央政府から経済改革のプログラムの参考として、我が国のコンテンツ産業の紹介を求められたことに端を発する。そのためにTV局やコンテンツIP産業関係者や我が国エンタメ産業の研究者など方々を含めて今回の訪問団は組織化されたものである。4日間の現地滞在中には、これらのメンバーによりウズベキスタンデジタル技術省および文化省映画製作庁の高官との面談をはじめ、複数の有力大学の訪問、ソフトウェア開発施設の見学などを精力的に実施し、有益な意見交換を行ってきたところである。その結果、今回の訪問は現地政府関係者から高く評価されて、今後も継続的なアドバイス提供を求められるまでの大きな成果を残すことができた（実際に、12月には要請により参加メンバーの一部がウズベキスタン再訪を果たしている）。

さて、立て込んだ日程の中でも足を延ばした古都サマルカンドにあるティムール朝の建造物の荘厳さ



と、とりわけ天空の深さを写したような青色の見事さは息をのむほどであった。だが、個人的に深く心に残るのは、タシケントの市民墓地の一角にある日本人抑留者が眠る共同墓地を訪れ、手向けることができたことである。終戦直後に当時のソビエトによりシベリアに連行された日本兵の一部はウズベキスタンにまで送り込まれ、現地のインフラ整備や建設事業に強制的に従事させられたことを多くの日本人は知らない。彼らは勤勉に働き、高い技術力を発揮して現地に貢献したことから、ソ連時代に日本人墓地を整理しようという動きがあった際も、当時の指導者はこれを退け、墓地を長年にわたり手厚く保護するよう指示したというエピソードが残っている。この墓地は、今も現地の人々によってよく手入れされており、日本とウズベキスタンの友好の証として守られている。

2025 年年末